様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｈ０３１５６

研究課題名（和文）コロナ禍で戦う支援者のモラルを護る心理的支援技術の開発研究

研究課題名（英文）Development of a psychoeducational program to protect morals in frontline workers fighting the Covid-19

研究代表者
太刀川　弘和（TACHIKAWA, Hirokazu）

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：１０３４４８８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,230,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍で生じた様々な支援者のモラルと活動中に生じるジレンマを調査すると共に、モラルを維持するための支援者の心理支援手法の開発を目的とする研究を行った。その結果、COVID-19治療病棟の看護師やダイヤモンド・プリンセス号集団感染事故の救援者、さらに自殺予防に関わる幅広い支援者に、コロナ禍でモラルジレンマやモラルディストレスが生じたことが見出された。また自殺予防支援者、医療従事者を対象とする「支援者のモラルを護る心理的支援プログラム」を開発した。有効性を検証するためのランダム化比較試験を行った結果、本プログラムがモラル傷害を予防するための論理的思考力向上に有効であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、コロナ禍という特殊状況で「モラルが傷害される状態」に至る心理機制について、COVID-19と戦う広範な支援者を対象に詳細に検討を行った。調査成果は順次学術誌に発表し、メンタルヘルス領域のモラル概念普及に寄与した。また、翻訳したモラルレジリエンス尺度は、原著者から国際ワークショップに招かれ、今後国際研究グループとして活動していくことになった。このように研究成果の学術的意義は高い。さらに、モラル傷害を予防する心理技術と研修手法を開発し、その有効性を部分的に検証できたことから、ポストコロナの職域メンタルヘルス、災害支援領域の支援者支援に役立たせることができると思われ、社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to investigate the moral of various supporters and the dilemmas that arose during their activities in the corona disaster, as well as to develop psychological support methods for supporters to maintain their morals. As a result, it was found that the corona disaster caused moral dilemmas and moral distress among nurses in the COVID-19 treatment ward, rescuers of the Diamond Princess mass infection incident, and a wide range of supporters involved in suicide prevention. We also developed a "psychological support program to protect the moral of supporters" for suicide prevention supporters and health care workers. The results of a randomized controlled trial to verify the effectiveness of the program suggested that the program was effective in improving logical thinking skills to prevent moral injury.

研究分野：精神医学

キーワード：モラル　支援者支援　新型コロナウイルス感染症　医療従事者　災害救援者　自殺予防支援者　心理的支援プログラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2020 年から多数の感染者、死者が生じた COVID-19 の感染拡大、いわゆる「コロナ禍」においては、ウイルス自体による身体危機のみならず、感染恐怖、自粛による孤立、抑うつなどメンタルヘルスの危機、とりわけ経済危機による自殺者の増加が生じ、いのちの電話等自殺念慮者に対応する支援者の不足が指摘された。さらに、COVID-19 に対応する医療従事者の深刻なメンタルヘルス不調が国内外で報告された。

この未曽有の感染症災害とそれに伴う国民のメンタルヘルス危機に対応するためには、COVID-19 に対応する幅広い支援者（ボランティア、救急隊等の災害救援者、看護師・保健師等の医療従事者、自治体職員）の養成、支援技術の向上と同時に、彼らのメンタルヘルスを維持する、支援者の心理的支援の技術開発が喫緊の課題とされた。従来、災害や自殺予防の支援技術は、あくまで支援を受ける被災者や自殺念慮者（受援者）のニーズに沿った対応を目的とした良心的内容で、臨床的に支援者が頻繁に遭遇する受援者のニーズのずれ、受援者の過度の要求、依存、攻撃性への対応、自殺希求への支援の限界といった活動上支援者に生じる心理的葛藤（ジレンマ）への対応は含まれていなかった。このため、支援活動において対象に共感して生じる共感疲労、感情労働など特有の職業性ストレスが高まり、支援者に燃え尽きや抑うつが生じることがあった。また、その心理的負担から、活動をやめる支援者も多く、災害対応や自殺予防の人的資源の不足に直結した。

特にコロナ禍における医療従事者のメンタルヘルス悪化の要因として、不条理な事態で医療者のモラルが傷つく「モラル傷害」が指摘された。この概念は、元々戦争などの極限状況において自分の倫理・道徳に反して組織の命令で殺傷行為をすることで生じる心理的外傷を指していたが、コロナ禍では医療従事者が自分の感染リスクを冒して活動したり、治療法がない中感染死亡を目の当たりにしたりすることで生じる、燃え尽きや心的外傷後ストレス障害の発生プロセスの中間要因として、欧米で報告されるようになった。もしモラル傷害が組織と個人の心理的ジレンマの結果であれば、支援者がそのような場面での心理的態度と対処行動を学習し、あるいは所属組織がその風土を改善して支援者を守ることができるような心理支援技術によって、モラル傷害を「予防」し、メンタルヘルスを維持できるはずである。しかし、今までにこのような医療機関や相談機関の支援者のモラルを護る心理的支援手法の報告はほとんどない。モラルの検討は主に倫理学をはじめとする人文諸科学領域で行われており、モラルの観点から支援者の問題を検討した研究はほとんどない。さらに欧米のモラル概念が我が国では「信念、道徳、倫理」といった多義的な翻訳で遵守すべき行動規範として扱われ、モラル傷害のリスクやそれを護る方法は教えられていない。

２．研究の目的

そこで本研究では、様々な支援者のモラルと活動中に生じるジレンマを調査すると共に、モラルを維持するための認知の修正と対処行動を学習する支援者の心理支援プログラムを開発し、有用性を検証することを目的とする。

３．研究の方法

（１）モラル傷害の実態調査・文献調査

研究初年度は、内外の文献調査、支援者のモラル傷害・モラルディストレスとメンタルヘルス実態調査、ならびに先行するモラル傷害支援プログラムの調査により、コロナ禍における支援者の心理的支援ニーズを明らかにし、心理的支援技術のモデルを構築する。具体的には、以下の方法で行う。

① 支援者のメンタルヘルス実態調査

コロナ禍で戦う医療従事者及び災害・自殺予防等に関わる支援者を対象とする。WEB サーベイやインタビュー手法を用い、モラル傷害と関連メンタルヘルスに関する質的･量的調査研究を行う。

②プログラム開発のための調査

文献レビュー、諸外国の大学のモラル傷害、モラルディストレスの予防、改善プログラム内容調査などを行い、プログラム開発の示唆を得る。

（２）心理的支援プログラムの開発と実施

研究二年度は、実態調査による仮説を基に心理的支援プログラムを開発する。プログラムはモラル傷害の発生機序とモラルジレンマの解決法、モラルの苦悩の軽減手法を学習することによりモラル傷害に至る経路を抑止する予防介入を目的とした構成となる。学習は COVID-19 の感染を避けるため、主にホームページに音声付スライド等の教材などによるオンラインプログラムとする。プログラムは本プロジェクトの研究者（精神医学・災害・産業・地域保健）や国内外の専門家により検討を重ねてブラッシュアップした後、少数例に実施し、効果や課題を直前直後で検討するパイロット調査を行う。

（３）心理的支援プログラムの実施検証と評価

研究最終年度は、代表者、分担者の所属組織、所属学会（筑波大学附属病院、DPAT 事務局、日本自殺予防学会）等の協力を得て研修プログラムとして対象者を募集し、安定的な受講者数を確

保して実施検証と評価を行う本調査を実施し、その効果を検証する。効果検証は、対象をランダムに分け、オンライン研修プログラムと通常の感染予防対策研修プログラムのいずれかを受講してもらい、受講前、受講後、受講１か月後の 3 回アンケート調査を実施する対照比較研究を行う。アンケートでは、実態調査で用いた尺度を再度用い、得点が観察期間で変化するかどうか確認することにより、効果測定を行う。

４．研究成果

１）COVID-19 治療病棟の経験をした看護師のストレスと報酬の質的インタビュー調査

COVID-19 感染症対応病棟へと運用転換を余儀なくされた病棟に勤務する医療従事者のメンタルヘルスの悪化に関連する要因やその保護要因を質的研究にて明らかにするインタビュー調査を 12 名に実施した。12 名のインタビューを逐語録化し、それをもとに質的な分析を行い、メンタルヘルスの悪化やその保護に共通する要因を探索した結果、７つのサブカテゴリー、３つのカテゴリーが抽出された。「どこで感染するかわからない怖さ」という［COVID-19 に感染する怖さ］、「コロナ病棟への配属は隠していた」という［COVID-19 対応病棟で勤務していることを公言できないストレス］という【COVID-19 そのものに関連したジレンマ】が生じていた。また、「話が来たら断る理由はない」という［看護師としての使命感・責任感］、「他部署の人とのつながりができた」「団結して頑張れた」「すごくいい経験をさせてもらった」という［経験の重要性］を語っており、「期間がわかっているから楽だった」「業務がこなせるか不安」という［慣れない業務へのストレス］がありながらも【仕事のやりがいに関連したジレンマ】を抱いていた。

２）ダイヤモンド・プリンセス号集団感染事故における医療救援者のメンタルヘルス調査

2020 年 2 月に、横浜港でクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の集団感染事故があり、多数の災害派遣チームが救援活動を行った。未知のウイルスによるクルーズ船の集団感染という特殊状況下で活動した支援者・救援者のメンタルヘルスの実態を知り、今後同様な事故が生じた際の支援のヒントを得る目的で調査データを分析した。2020 年 2 月にダイヤモンド・プリンセス号の集団感染事故において検疫を含む医療支援活動に従事した救援者のうち、同年 7 月 1 日～9 月 30 日までの 3 か月間開設した「救援者のメンタルヘルス支援ホームページ」の利用者を調査対象とした。ページで収集した匿名のストレス調査データを抽出し、各心理尺度をカットオフ値で分割し、従属変数、属性、活動状況を比較するクロス集計を行った。ストレス調査で結果の得られた対象者のうち精神的不調が救援者の約 3 割、不安が約 4 割、トラウマティックストレスが約 4 割に認められた。メンタルヘルス不調者はそうでないものに比して、年代、職種、役割に加え、救援活動の際の経験に違いがみられた。精神的不調に有意に関連したのは、年齢が低い、医師以外の医療職、活動後の十分な休養がとれないことなどであった。不安への影響要因は、医者以外の医療職、活動前に活動内容の説明を受けていない、モラルディストレスがある事であった。トラウマティックストレスの影響要因は、モラルディストレスがある事であった。本調査から、未曽有の事態で不条理な活動を強いられる救援者には、モラルディストレスを軽減しトラウマティックストレスを予防する特別なチーム運用と訓練が必要と考えられた。

３）自殺予防に関わる支援者のメンタルヘルス調査

COVID-19 パンデミック時の自殺予防支援者の心理的苦痛と関連因子を明らかにすることを目的に、2021 年 5 月から 7 月にかけて、いのちの電話や精神科医療機関の支援者を対象にウェブアンケートを実施した。818 人の参加者を分析した結果、精神科医療機関の医療従事者では、ヘルプラインボランティアよりも心理的苦痛が有意に高かった。両職種において心理的苦痛に最も関連した因子は、過労による休息不足であった。いのちの電話ボランティアにおける苦痛は、自殺念慮や自殺企図をもつ人々を支援する能力の欠如、COVID-19 に関連する過剰なメディア報道、クレーマーへの対応に悩むことと関連していた。医療従事者の苦痛は、感染予防対策のために患者に十分な支援を提供できないことと関連していた。パンデミック時の自殺予防支援者の心理的苦痛は，過重労働，ヘルプラインボランティアが自殺予防の訓練を受けられないこと，医療従事者が感染予防対策により十分な支援しかできないことなどが影響していたことから、パンデミック時の自殺予防活動を維持するためには、支援者の心理的苦痛の要因に応じた対策を実施することが必要と考えられた。

４）モラル傷害、モラルディストレスの介入プログラムに関するシステマティックレビュー

モラル傷害を予防する心理教育プログラムの開発のために、初年度は国内外の Moral injury あるいは Moral distress 関連の先行研究を系統的かつ包括的な手法を用いて収集し、本テーマに関する介入研究の介入プログラム内容、現時点でのエビデンス、Moral injury あるいは Moral distress の学術的定義などを整理した。具体的には、まず研究班内の 7 名の研究者で、Moral injury あるいは Moral distress 関連の用語を整理し、系統的レビュー実施に向けた検索式を作成した。さらに、本系統的レビューの適格基準および除外基準を定めた。そして、系統的レビューのプロトコルを作成し、系統的レビュープロトコル登録サイトである PROSPERO に登録した（CRD42021266044）。その後、複数の文献データベースを用いて論文を検索し、最終的には 10 報の適格論文を抽出した。抽出論文の研究内容から、モラル傷害予防プログラム作成の示唆を得た。

５）モラルレジリエンス尺度日本語版の作成

モラルジレンマに日常的に遭遇する医療現場における日々の課題を克服するためには、道徳的苦痛や道徳的苦悩に対処する介入方法の開発が極めて重要である。介入効果を評価するための心理尺度として、モラルのレジリエンス（回復力）概念に着目した Rushton Moral Resilience

Scale-16 を日本語に翻訳し、日本での適用可能性を検証した。看護師 498 人を含む 1,295 人の医療従事者を対象に、ウェブアンケートを用いた横断的調査を実施した。信頼性分析、確認的因子分析、相関分析、t 検定、分散分析を用いて尺度の妥当性を評価した。すべての下位尺度と全尺度は十分な信頼性を有していた。当初の 4 因子構造（道徳的逆境への反応、個人的誠実さ、関係的誠実さ、道徳的効力）に基づいて確認的因子分析を行ったところ、許容可能な適合指数が得られた。しかし、下位尺度、特に個人的誠実性と関係的誠実性に関する下位尺度のテスト・リテスト信頼性は低かった。全体として、妥当性が確認された日本語版 RMRS-16 は、医療従事者のメンタルヘルス向上に有用な指標であることが確認された。本尺度研究は、原著者から国際ワークショップに招かれ、今後モラルレジリエンスの国際研究グループとして活動していくことになった。

６）支援者のモラルを護る心理的支援プログラムの開発・効果検証

モラル傷害に関わる各種実態調査の結果、ならびにシステマティックレビューで得られた知見を基に、まず自殺予防支援者を対象とするモラル傷害予防を目的とする心理的支援プログラムを開発した。具体的には、モラルジレンマやモラル傷害の発生機序などを動画で学ぶ e ラーニングとモラルジレンマやモラル傷害を抱える事例を「モラルジレンマ・モラル苦悩の解決シート」を用いて検討するオンラインカンファレンスの３つのモジュールからなる予防教育プログラムである。効果検証のため、国内在住の自殺予防支援者（医療従事者、地域の保健福祉職、電話相談員など）を対象とした Waiting List Control デザインを用いたランダム化比較試験（RCT）を研究班全員で実施した研究対象者は日本全国へ広げ、様々な地域、職種の対象者 56 名を確保した。介入群は 2023 年 4 月、統制群は同年 5 月にオンライン研修を実施し、介入前後に効果を測定した。モラル傷害の概念に関する教育効果、倫理的効力感が有意に向上したことから、本プログラムがモラル傷害を予防するための論理的思考力向上に有効であることが示唆された。

次に対象を医療従事者にして e ラーニングの内容を改変した「医療従事者のモラルを護る心理的支援プログラム」を開発し、自殺予防支援者を対象にした RCT と同様の研究デザインを用いてその効果を検証した。介入群は 2023 年 12 月、統制群は 2024 年 1 月にオンライン研修を実施し、効果測定を介入前後に実施した。45 名の参加を得た。介入効果は分析中である。

７）その他の研究成果

支援者のモラルを保護するロールモデルとなる映画の調査を行った。また、一般への啓発活動として、様々なコロナ禍のメンタルヘルスに関する総説を出版した。コロナ禍のモラル問題と支援者のモラル支援の方法について学際的に検討するため、2022 年 2 月 20 日に公開ウェビナー「コロナ禍の支援者における「モラル」を考えるシンポジウム-対立と葛藤を越えて」を開催し、哲学思想、災害支援学、精神看護学、心理学の専門家を招いてコロナ禍のモラルジレンマの知識を共有し、議論を深めた。さらに心理教育プログラムのプラットフォームとして支援者の「モラル」とメンタルヘルスを学ぶウェブサイトを開発した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 太刀川　弘和	４．巻 35
２．論文標題 コロナ禍における日本の自殺について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本総合病院精神医学	６．最初と最後の頁 105-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太刀川　弘和	４．巻 43
２．論文標題 コロナ禍の災害精神支援と自殺対策へのヒント．シンポジウム　災禍の自殺対策ー支援を創意工夫するためのヒントー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 自殺予防と危機介入	６．最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太刀川　弘和	４．巻 287
２．論文標題 ダイヤモンド・プリンセス号隔離期間における乗船者のメンタルヘルス	５．発行年 2023年
３．雑誌名 医学のあゆみ	６．最初と最後の頁 159-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋　晶	４．巻 192
２．論文標題 精神科領域における新型コロナウイルス罹患後症状のマネジメント（罹患後精神症状）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 心と社会．日本精神衛生会	６．最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ujihara Masana、Tachikawa Hirokazu、Takahashi Asumi、Gen Towa、Cho Yoshinori	4．巻 20
2．論文標題 Factors Related to Psychological Distress in Suicide Prevention Supporters during the COVID-19 Pandemic	5．発行年 2023年
3．雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6．最初と最後の頁 4991～4991
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph20064991	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 氏原　将奈，太刀川　弘和	4．巻 53
2．論文標題 コロナ禍で戦う支援者の心理的支援－モラルの視点を踏まえて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地域保健	6．最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋 晶	4．巻 34
2．論文標題 多発する災害・コロナ禍において総合病院精神科に求められることと人材・リーダーシップ.	5．発行年 2022年
3．雑誌名 総合病院精神医学	6．最初と最後の頁 342-347
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋 晶	4．巻 48
2．論文標題 医療者への対応・リモート　総合病院での新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関わるこころのケア	5．発行年 2022年
3．雑誌名 精神療法	6．最初と最後の頁 466-472
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kunii Yasuto、Usukura Hitomi、Otsuka Kotaro、Maeda Masaharu、Yabe Hirooki、Takahashi Sho、Tachikawa Hirokazu、Tomita Hiroaki	4．巻 -
2．論文標題 Lessons learned from psychosocial support and mental health surveys during the 10 years since the Great East Japan Earthquake: Establishing evidence‐based disaster psychiatry	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/pcn.13339	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takagi Y, Takahashi S, Fukuo Y, Arai T, Tachikawa H	4．巻 18
2．論文標題 Acute-Stage Mental Health Symptoms by Natural Disaster Type: Consultations of Disaster Psychiatric Assistance Teams (DPATs) in Japan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Int J Environ Res Public Health	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph182312409	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nakao T,Takahashi S	4．巻 18(14)
2．論文標題 Mental Health Difficulties and Countermeasures during the Coronavirus Disease Pandemic in Japan: A Nationwide Questionnaire Survey of Mental Health and Psychiatric Institutions	5．発行年 2021年
3．雑誌名 International Journal of Environmental Research and public Health	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph18147318	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Midorikawa H, Tachikawa H, Taguchi T, Aiba M, Shiratori Y, Takahashi A, Takahashi S, Nemoto K, Arai T	4．巻 11(7)
2．論文標題 Demographics associated with stress, severe mental distress, and anxiety symptoms during the COVID-19 pandemic in Japan: nationwide cross-sectional web-based survey	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JMIR Public Health Surveill	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2196/29970	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前田正治、松本和紀、八木淳子、高橋晶	４．巻 19（2）
２．論文標題 東日本大震災から10年，支援者として走り続けた経験から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 トラウマティック・ストレス	６．最初と最後の頁 71（159）－79（167）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋　晶	４．巻 15巻6号
２．論文標題 【差別・偏見からスタッフを守るために　コロナ離職にどう向き合うか】災害対応の視点から考えるコロナ離職への向き合い方	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Nursing BUSINESS (1881-5766)	６．最初と最後の頁 514-517
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島義高	４．巻 36(8)
２．論文標題 コロナ禍における世界の自殺対策（その後の自殺対策Ⅰ　社会的な自殺問題と対策の現在）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神科治療学	６．最初と最後の頁 951-956
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 瀬尾恵美子　太刀川弘和	４．巻 38(6)
２．論文標題 医師，医療者のストレスとCOVID-19	５．発行年 2021年
３．雑誌名 精神科	６．最初と最後の頁 702-707
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太刀川弘和	4．巻 41（1）
2．論文標題 医療従事者のメンタルヘルスをどう維持するか	5．発行年 2021年
3．雑誌名 自殺予防と危機介入	6．最初と最後の頁 12-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太刀川弘和　安部秀三	4．巻 40(12)
2．論文標題 災害時における医療従事者のメンタルクライシスとケア	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日精協誌	6．最初と最後の頁 1124-1129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　7件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 氏原将奈、川島義高、笹原信一朗、綿谷恵子、松浦麻子、高橋 晶、太刀川弘和
2．発表標題 自殺予防支援者のモラルを護る心理的支援プログラムの開発と検証
3．学会等名 第47回日本自殺予防学会総会
4．発表年 2023年

1．発表者名 松浦麻子、笹原信一朗、綿谷恵子、氏原将奈、川島義高、高橋晶、太刀川弘和、石塚真美、室井慧、高橋司、堀大介、道喜将太郎、松崎一葉
2．発表標題 COVID-19 対応病棟で勤務する看護師の業務遂行上のジレンマの様相
3．学会等名 第31回日本体力・栄養・免疫学会学術集会
4．発表年 2023年

１．発表者名 高橋晶
２．発表標題 コロナ禍、そして人々の絆
３．学会等名 第15回日本不安症学会学術大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋晶
２．発表標題 COVID-19罹患後精神症状の外来対応と医療従事者のメンタルヘルスケア
３．学会等名 第53回日本神経精神薬理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋晶
２．発表標題 アフターコロナの看護職のメンタルヘルス　交流集会「看護職のバーンアウトや離職を防ぐメンタルヘルスケア～個人への効果的なセルフケアサポートと組織によるラインケアを考える～」
３．学会等名 第54回日本看護学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋晶
２．発表標題 支援者支援概論　救援者・支援者のメンタルヘルスサポート
３．学会等名 第29回日本災害医学学会総会学術総会
４．発表年 2024年

１．発表者名 太刀川弘和，高橋晶， 笹原信一朗， 川島義高，氏原将奈， 綿谷恵子， 松浦麻子
２．発表標題 モラルを護る映画はあるか？映画のシステマティックレビュー
３．学会等名 第69回日本病跡学会総会（つくば）
４．発表年 2022年

１．発表者名 氏原将奈，太刀川弘和，玄東和，菅原大地，茂木麻由，張賢徳
２．発表標題 コロナ禍における自殺予防支援者のストレスと不安-質的分析から見えた課題
３．学会等名 第46回日本自殺予防学会総会（熊本）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋晶，田口高也，高橋あすみ，笹原信一朗，川島義高，新井哲明，太刀川弘和
２．発表標題 ダイヤモンドプリンセス号で支援活動を行った救援者のメンタルヘルス
３．学会等名 第30回日本精神科救急学会（浦和）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋晶，太刀川弘和
２．発表標題 ダイヤモンド・プリンセス号で支援活動を行った救援者のメンタルヘルスとモラルの傷つき
３．学会等名 第28回日本災害医学会（盛岡）
４．発表年 2023年

１．発表者名 川島義高、米本直裕、高橋晶、笹原信一朗、氏原将奈、綿谷恵子、太刀川弘和
２．発表標題 医療従事者のMoral injury／distressに対する介入効果のエビデンス集積：ランダム化比較験の系統的レビュー
３．学会等名 第35回日本総合病院精神医学会総会（東京）
４．発表年 2022年

１．発表者名 太刀川弘和
２．発表標題 コロナ禍の災害精神支援と自殺対策へのヒント シンポジウム１　災害と自殺予防
３．学会等名 第46回日本自殺予防学会総会（熊本）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋　晶
２．発表標題 長期化した新型コロナウイルス感染症対応における医療従事者のメンタルヘルス
３．学会等名 第21回トラウマティックストレス学会（東京）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松浦麻子、笹原信一朗、綿谷恵子、氏原将奈、川島義高、高橋晶、太刀川弘和、呉移、石塚真美、室井慧、池田朝彦、高橋司、堀大介、道喜将太郎、松崎一葉
２．発表標題 COVID-19対応病棟におけるモラルディストレスに関するインタビュー調査
３．学会等名 第30回日本体力・栄養・免疫学会学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高橋　晶
２．発表標題 「COVID-19 をはじめとするパンデミックに対して精神科医療が備えたいもの」
３．学会等名 第 23 回有床総合病院精神科フォーラム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋　晶
２．発表標題 教育講演　EL10　新型コロナウイルス感染症・災害に関して精神科に必要な危機管理
３．学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 翠川晴彦、櫛引夏歩、田口高也、高橋晶、白鳥裕貴、根本清貴、笹原信一朗、大井　雄一、道喜将太郎、堀大介、松崎一葉、新井哲明、山縣邦弘、太刀川弘和
２．発表標題 新型コロナウイルス感染症対応病院における医療従事者のメンタルヘルス
３．学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋　晶
２．発表標題 CS29-3　東京オリンピック、大阪万博、マスギャザリング災害に向けた精神・心理関連職種の準備と対応について
３．学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋　晶
２．発表標題 災害精神保健医療福祉領域のよりよい協働のための方策
３．学会等名 公衆衛生学会　シンポジウム28「地域包括ケアと災害保健医療福祉対策：多職種連携は他職種の活動や役割を知ることから」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 太刀川弘和
２．発表標題 教育講演　「コロナ禍のこころのケアと専門職連携」
３．学会等名 第14回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋　晶
２．発表標題 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）医療の現場で起きている課題と支援者支援
３．学会等名 第23回　感情・行動・認知（ABC）研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 太刀川弘和（分担執筆）	４．発行年 2023年
２．出版社 認定病院患者安全推進協議会	５．総ページ数 98
３．書名 患者安全推進ジャーナル別冊　病院内の自殺対策のすすめ方　改訂版　「パンデミックと自殺問題」	

１．著者名 太刀川弘和（分担執筆）	４．発行年 2024年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 604
３．書名 標準精神医学　第9版　第８章　精神医療と社会「Ⅲ．災害精神医学」	

１．著者名 高橋晶（分担執筆）	４．発行年 2024年
２．出版社 日本医事新報社	５．総ページ数 216
３．書名 ER・救急で役立つ 精神科救急A to Z「13．災害とメンタルケア」	

１．著者名 ロバート・J・ウルサノ、キャロル・S・フラートン、ラース・ウェイゼス、ビヴァリー・ラファエル、重村　淳　（分担）高橋　晶	４．発行年 2022年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 420
３．書名 災害精神医学ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

支援者の「モラル」とメンタルヘルスを学ぶサイト
https://tsukuba-medical.netlify.app/
筑波大学医学医療系臨床医学域　災害・地域精神医学
https://plaza.umin.ac.jp/~dp2012/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高橋　晶 (TAKAHASHI Sho) (10365629)	筑波大学・医学医療系・准教授 (12102)	
研究分担者	笹原　信一朗 (SASAHARA Shinichiro) (10375496)	筑波大学・医学医療系・准教授 (12102)	
研究分担者	川島　義高 (KAWASHIMA Yoshitaka) (20647416)	明治大学・文学部・専任准教授 (32682)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	氏原　将奈 (UJIHARA Masana)		
研究協力者	松浦　麻子 (MATSUURA Asako)		
研究協力者	綿谷　恵子 (WATAYA Keiko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関